

人が捉えたカラスの姿

「生物」としてのカラスと 「イメージキャラクター」としてのカラス

外国语学部 国際文化交流学科 4年

中川 鮎美

序章：「生物」としての動物、「イメージキャラクター」 としての動物

動物を一種思い浮かべてほしい。その動物について考えたとき、その動物がある生態をもつ「生物」であるということの他に、その動物の性格・縁起の良し悪し・関連物といった「イメージ」が想起されないだろうか。具体的な例を挙げてみよう。古くは人を化かす動物とされ、狡猾さを表す比喩する語でもあるタヌキやキツネ。縁起物とされ、慶事の意匠に多く見られるツルやカメ。月の模様の連想から月に関わる意匠として用いられるウサギ。害鳥・凶鳥として忌避されるカラスなど…人にとって動物たちはただ一種の「生物」であるだけでなく、なにかしらのイメージの「比喩・象徴」として言葉(語彙や諺)・説話・意匠に用いられる「イメージキャラクター」もあるのだ。

では、動物たちに付与されたキャラクター性とその源となるイメージはどうやって形成されてきたのだろうか。このテーマについて、私は動物の中でも「カラス」を取りあげて、日本や周辺国を中心にカラスが登場する言葉・説話・意匠を収集し、カラスの「イメージ」の多様性を調査しイメージ・文化形成の過程を研究している。カラスは日頃目にできる鳥の中でも際立って目立つ。人の生活圏にも生息し、猛禽類に次ぐ大きな体躯と全身黒の容姿やよく通る声と優れた知能を備えた鳥だ。生息地域は広く、南極とニュージーランドを除くほぼ全大陸に暮らしている。カラスはこの特徴的な容姿・声と分布の広さゆえに世界中の多くの人の目に触れ、清邪貴賤の幅広くキャラクタライズされ、世界各地の語彙や諺・説話・意匠に多く現れているのだ。本論文ではカラスがい

かなる「生物」であるかをふまえ、今日のカラス「イメージ」がどのように形成されていったのかについて、生態や文化背景を取り上げながら論じていく。収集した例は日本を中心に東アジアに属するものが多いが、具体的な類似例がある場合はこの範囲外の地域に属する例も挙げていく。

第1章：カラスという「生物」

本章ではカラスの生態や人が「カラス」と認識するカラス種について整理し、カラスとはいかなる「生物」であるのか、また人の「カラス」定義を明らかにしていく。まず、広義でのカラスと狭義でのカラス、一般そして本論文における「カラス」の定義を明確にしておこう。ひとくちに「カラス」といってもカラスという名の鳥はない。カラス科カラス属に分類される鳥の中に、これは「カラス」であると人が認識するカラス種が数種いるのだ。

広義では鳥類スズメ目に属するカラス科[Corvidae]の鳥を指す。このカラス科にはカラス属の他、カケス属やカササギ属が含まれており、「カラス」というには広すぎる範囲である。狭義ではこのカラス科の下位分類であるカラス属[Corvus]またはその近縁に属する種の鳥を指す。およそ「○○ガラス」といつて差し支えない範囲はここからだろう。ただし、狭義のカラスの中には西日本に冬鳥として渡ってくるコクマルガラスなど、体毛が白黒2色で一般にいう「カラス」とは外見が大きく異なるカラスも属している。本論文では生物学上の分類よりも人々が「カラス」と捉えるカラス種を研究対象とするため、カラスの特徴を重視し、狭義のカラスの中でも体毛が黒一色でカーガーと鳴くカラス種のみを「カラス」とし

人が捉えたカラスの姿

て扱うこととする。なお、容姿を黒一色に限定しても、種により体躯の大きさ・嘴の形・尾の形・食性の傾向、また留鳥¹であるか否かといった条件があるが、本論文では「カラス」定義の範囲内の種で生まれる差異として扱う。以下本文に出てくるカラスは「カラス」定義にあてはまる鳥とし、より詳細に種に言及している場合のみ種名で記すこととする。

①：カラスの生態と行動

カラスは南極とニュージーランドを除き全大陸に分布する雑食性の鳥である。知能は高く社交性や学習能力があり、道具や環境の利用した行動が発見されている。カラスは昼行性で日の出から日の入りまで行動するが、非繁殖個体と繁殖個体によって行動体系が異なる。縄張りを持たない若鳥（非繁殖個体）は若鳥同士で非繁殖群を形成し、繁殖ペアができるとペア（繁殖個体）は群から独立し、縄張りを取得・維持するようになる。基本的にペアは繁殖を経ても持続され、ペア外で営巣・繁殖することはない。

カラスの卵は約 20 日間の抱卵を経て孵る。カラスは鳥類の中でも巣立ちに要する期間が長く、約 35 日を要する。約 1 か月で成鳥ほどの体躯に成長し巣離

れするが、独り立ちには 2 ヶ月～半年以上かかり、繁殖ペアを形成し始めるのは生後約 3 年後からとなる。

②：カラスの種類

日本で確認できるカラス種は主に留鳥であるハシブトガラス、ハシボソガラス、そして渡り鳥であるワタリガラス、ミヤマガラスなどがある。渡りを行う種は飛来地域が限定的であるため、日本においてカラスという語はハシボソガラス及びハシブトガラスを指す語といってよいだろう。以下の表 1 は上記で紹介した 4 種の主な特徴をまとめたものである。

ひとくちにカラスといってもその生態は種ごとに異なっている。目立つ差異としては体躯の大きさ、また、食性の傾向（雑食のうちの好み）やその傾向に適した嘴の形、棲み処とする場所の傾向の差異もある。ワタリガラスはカラス種の中でも最大の体躯と長く大きな嘴をもち、食性の傾向において特に大型哺乳類の死肉や腐肉を好む（大型哺乳類の死肉や腐肉ありつける機会が多い）という点などからも、他カラス種に対して一線を画する種である。ハシブト

【表 1：日本に生息するカラス種】

種名 (和名と学名)	体躯 (全長と翼開長 ²)	世界的分布、日本内分布 生息地の傾向	食性と傾向 ほか特徴
ワタリガラス <i>Corvus corax</i>	全長 60 cm 翼開長 100～150 cm	ユーラシア大陸全域 北米大陸 日本では冬季の渡り鳥、 北海道の一部に飛来	雑食性 大型哺乳類の死肉や 腐肉を好む
ハシブトガラス <i>Corvus frugilegus</i>	全長 55 cm 翼開長 100 cm	ユーラシア大陸東部 日本ほぼ全域で留鳥 森林・都市部など密集地	雑食性 肉など脂質を好む
ハシボソガラス <i>Corvus corone</i>	全長 50 cm 翼開長 100 cm	ユーラシア大陸東部・西部 日本ほぼ全域で留鳥 農耕地など開けた場所	雑食性 植物質を好む
ミヤマガラス <i>Corvus Frugilegus</i>	全長 47 cm 翼開長 90 cm	ユーラシア大陸中緯度 日本では冬季の渡り鳥、 九州を中心に本州西部 農耕地など開けた場所	雑食性 大規模な群を作る

ガラスとハシボソガラスの大きさはほとんど変わらないが、その名にあるように嘴の形状が異なり、活動場所や食性の傾向に違いがある。ハシブトガラスの嘴は太く鉤の角度が強く、ハシボソガラスの嘴は細く角度は弱い。いずれも雑食性ながらハシブトは肉・脂質を好み、ハシボソは植物質を好む傾向にある。営巣・活動場所の傾向としてはハシブトが森林や都市部といった密集地を中心に、ハシボソが田園・農耕地など開けた土地を中心に生息している。ミヤマガラスは4種の中でも小さな体躯であることと嘴が鼻回りのみページュであることが容姿上の差異となるが、最も特徴的な性質は大規模な群を形成することであり、この大群は他種の鳥（コクマルガラスなど）と混成することもある。以上の4種が「カラス」を代表するカラス種であるが、日本内では渡りを行うワタリガラス・ミヤマガラスの二種は観察できる地域はかなり限定的であるため、カラスイメージへの影響力は少ない。

③：カラスという名称

さて前節まではカラスの生態や分類など生物としてのカラスについて述べてきたが、本節からは人が「カラス」と認めるカラスについて整理するためにカラスという名称と名称が生まれた背景に注目しよう。

まずは日本語の「カラス」だ。本章の冒頭で紹介し

たカラス定義…大きく黒くカアカアと鳴く鳥が、日本語の「カラス」が示すものであり、分布からいって「カラス」該当種はハシブトガラス及びハシボソガラスであろう。嘴の形や食性・分布の傾向といった差異はあるが、大きさに目立った差異ではなく、人が日頃生活する上で種を認識する機会・必要は少なく、種毎にまったく音韻の異なる名付けを行っていない。カラス種に言及する場合は「〇〇カラス」と表し、「カラス（カラス）」が接尾語となっている点からして、後代になってカラス種を区別する必要に応じての名付けであろうと考えられる。

ではカラスをなぜ「カラス」と呼ぶか、その語源については古語で鳥を表す接尾語「ス」を基盤に2つの説が唱えられている。ひとつは容姿語源説で、その黒い容姿から「黒し[クロシ]」もしくは「黒[クロ]+ス」が転じて「カラス」となったという説だ。そしてもうひとつはその鳴声語源説から、「カー・コー／カラ・コロ」という鳴く鳥ということで「カラ・コロ+ス」が転じて「カラス」となったという説だ。鳥類の名付けに関しては、他の鳥の名を鑑みても、姿ないし鳴き声が名付けに関わっているとするのは適當だろう。鳥を表す接尾語「ス」に関わるだろう名には、カラスの他にウグイスやホトトギスなどが挙げられ、いずれも「鳴き声+ス」とする説をもった名称とされる。

【表2：カラス名称・オノマトペ一覧】

	カラス総称 カラス属小型種	カラス属大型種 ワタリガラス	群居するカラス ミヤマガラス	鳴き声表現
日本語	鳥[カラス]	鴉[カラス]・大鴉[オオガラス] 渡鴉[ワタリガラス]	鳥 深山鳥[ミヤマガラス]	「カー」「ガー」 古くは「カラ」
中国語	鳥鴉[ウーヤー]	渡鴉[トゥーヤー]	鳥鴉 禿鼻鳥鴉 [フービー-ウーヤー]	「アーッ」「ヤー」 「カー」
英語	crow[クロウ]	raven[レイヴン]	rook[ルーケ]	「コー」 「クローケ」
ドイツ語	Krähe[クレーエ]	Rabe[ラーベ]	Krähe Saatkrähe [ザートクレーエ]	「クラー」
オランダ語	kraai[クラーイ]	raaf[ラーフ]	roek[ルーケ]	「カー」
スペイン語	corneja[コルネージャ]	cuervo[クエルヴォ]	調査中	「クルアーク」
フランス語	corbeau[コルボー]	grand corbeau[グラン・コルボー]	調査中	「クロアーヴ」

鳴き声をカラ・ウゲイ・ホトトギとした古代のオノマトペは現代のオノマトペとは異なるが、オノマトペとは聞き手の話す言語や属する地域・年代によって変動するものであるため、説の可能性を否定することはできない。

ではオノマトペと名付けとの関連性を明確にする上で、他言語での名称や鳴き声のオノマトペも参照してみよう。一部調査中の欄があるが、前ページの表2は各言語のカラスの呼称および鳴き声表現についてまとめたものである。

名称の音韻に関しては日本語含め各言語とも一様にc音・k音とr音を含んでいる。また、鳴き声についても同様で、いずれもc音・k音のみもしくはc音・k音とr音から成っており、名称とオノマトペの音韻が近いものがほとんどだ。容姿語源説を完全否定することはできないが、鳴き声語源説が普遍的な形成背景となっているのではないだろうか。「カラス」名称は「カー」「カラ」と鳴く大きな黒い鳥」を指す言葉で間違いないだろう。

ただしワタリガラス・ミヤマガラスについて独立した名付けを行っている例も確認できた。表1にあったように、ユーラシア大陸ではこれら2種のように差異が目立つ種の分布が被るため、種の差異を意識する機会・必要があったのか、「カラス属」「カラス」を総称する語、ワタリガラスはじめ「カラス属大型種を指す語」、ミヤマガラスはじめ「群居するカラスを指す語」とで独立した（「カラス」を意味する接頭・接尾語がない）名称が確認された。

第2章：鳥「イメージ」とカラス「イメージ」

本章では人が鳥やカラスから感じた「イメージ」そして鳥やカラスに付与した「イメージ」を明らかにしていく。人にとって鳥とは、カラスとはどのような「イメージキャラクター」であったのか。そのためにはまず鳥観をふまえた上で、鳥という存在の中でのカラスのイメージと位置づけを確認しよう。

①：鳥観・靈鳥観

古代より人々は様々な動物を信仰し、人間にはない容姿や機能に祈りを託してきた。それは鳥類も例外ではない。鋭い嘴は武器として魔を退ける力があ

ると考えられていたし、羽ばたく翼は人々が歩いては辿り着けない場所へ行ける力の象徴とされ、鳥は古代の人々にとって遠地や異界と通ずる存在、天空を往くものの化身と考えられていた。また鳥の鳴き声とは、鳥の名称を定めるに相応しいほどの特徴をもち、決まった時期・時間・場所で鳴くことには…また相対的に条件下以外で鳴くことにも、メッセージ性があると考えられ、神意・吉凶・予見など超常的な意味が宿ったものと受け取られることもあった。

こうした靈鳥觀があったのは日本も例外ではない。古代日本において鳥は異界に通じる存在とされ、靈鳥信仰も盛んであった。例えば神々の世界と地上の世界とを結ぶ「御先³」とされ、鳥の鳴声を吉報・凶報とする言い伝えや、神意や吉凶を占うにあたり鳥が関与する神事もあり、鳥を神の預言者や予言者として重要視していたことが伺える言い伝え・迷信・儀礼は今日にも残っている。記紀神話でも天(高天原)の神々から遣わされた数々の鳥たちが登場している。また鳥は死者の世界と地上の世界とを結ぶ存在として、数々の古墳から鳥形の木製品や埴輪が出土し、石室の壁画には船とその舳先に留まった鳥が描かれた天の鳥船図などが遺っている。記紀神話でも、アメノワカヒコの葬儀⁴にあたり、神が遣わした数種の鳥たちが葬儀を執り行う説話が登場する。こうした遺物は鳥(や船)に「靈魂の運搬者・先導者・守護者」といったイメージを宛てた世界観を示すものだろう。

また、鳥は「靈魂の化身」ともされ、肉体を離れた魂が鳥に化身したという逸話も世界各地に残されている。英雄の化身では、記紀神話においてヤマトタケルが死後ハクチョウに化身した説話や、ブリテンのアーサー王伝説においてアーサー王が死後ワタリガラスに化身した説話が語られている。靈魂の貴賤や平凡非凡を問わぬ例では古代エジプトで信じられていた人面の靈鳥バーなどがある。バーとは人間の魂・個性であり、死後は身体を離れ現世と死後の世界を飛んで行き来するといわれている。

②：カラス観

今まで広く共有されているカラスのイメージといえば、農作物や生ゴミを荒らす「害鳥」、死や凶事に際して現れる「凶鳥」といったネガティブなイメ

ジが一般的であろう。神聖とされる白とは対極的な黒一色の大きな体躯。姦しく不気味な声。そして人目の届く範囲で目立つ食料といえば残飯、そして死肉であった。天災と人々の死を描き遺した絵画には人の亡骸にカラスや犬が群がり、文学や芸術においてもカラスは惨たらしい死の比喩表現として用いられた。

また何より無視できないのが、カラスも「鳥」であるという点だ。前節の鳥観は日本に限らず、世界各地の鳥類説話、そしてもちろんカラスのイメージ・役割にも大きな影響をもたらしている。カラスの靈鳥性は死に関わって、死や凶事に際して、またその先触れとして現れる「凶鳥」たらしめたのだ。しかしながら死穢を食らう存在であるということは、転じて、死穢を取り込み、場を清浄に整える存在と見做されることに留意いただきたい。

靈鳥観を基にしたイメージ形成は、カラスの生態とあいまって「凶鳥」イメージを強化したが、一方で神聖性に関わった「吉鳥」イメージも強化していく。靈鳥進行そのままに動物信仰の中でカラスを神の一柱とするケース、神の御先とするケース、神の化身とするケース、信仰対象そのものとまではいかないながらもその関連として重要視するケースなどに派生していくのだ。日本では神武東征説話に登場する八咫鳥^{やたがらす}⁵が有名だろう。イメージ形成・関連形成の基礎を古代よりの鳥観に据えるにせよ、カラスの生態に据えるにせよ、実際に付与されるイメージは清邪貴賤の幅広く実に多様だ。

第3章：カラスが付与した・カラスに付与された「イメージ」とその「姿」

本章では前章のカラス観で挙げた要素及びそれに関連して付与されたイメージについて、説話・儀式・意匠などの例も用いながらより具体的に考察を深めていこう。

①：カラスと「死穢」

雑食性のカラスが食べられるものは多くある。自然界では木の実、昆虫、ネズミや小鳥、人の生活圏では残飯、農作物、そして家畜や人間の死肉までカラスの餌になる。風葬や、疫病・災害・戦争・刑死

などで亡骸が曝されれば、山であれ野であれ町であれカラスが突きにやって来る。カラスが留まった家や集まった場所、不気味な鳴き声・夜鳴き・鳴き騒ぎが人の死ぬのを予言するものだとする迷信は世界的に多く語られているし、文学芸術においてカラスは死を比喩・象徴するイメージ装置だ。まして死を疎む、もしくは死を不吉・不淨とする文化圏において、死穢に隣り合うカラスを凶鳥に定めるのは尤も過程だ。しかしながら相対的に、カラスが死穢を食べることについて、この行動を浄化・掃除とし、カラスを、場を清浄に整える存在と定めるケースもある。供養の面から、カラスが亡骸の肉を渉うことで、魂が身体から離れ、冥界に導かれるという考え方もある。こうしたケースは鳥葬を供養定型として行っている文化圏に多い。鳥葬を行う地域によってはカラスよりも大型の猛禽類がその亡骸の大部分を食べことになるが、こうした猛禽類は警戒心が強いいため、カラスが興味を示さないような亡骸には積極的に接近しないという。そのため、真の供養(猛禽類が亡骸を食べること)を先導するものとしてカラスを供養の吉兆として尊ぶケースもあるのだ。また間接的な供養として、日本では墓前の供え物をカラスが頂戴することが死者への供養になるとした見方もある。生態と死との関連・連想ひとつをとっても、そこから付与されるイメージは付与する人の置かれた環境・背景によって多様に派生しているのだ。

また軍営で出る残飯や死体を狙い戦場に現れるために「戦」と関連付けられるケースもあり、神武東征の先導・戦勝に寄与した八咫鳥、アレクサンドロス大王伝説において行軍を先導したカラス、ケルト神話において戦の女神の御先・化身とされるカラスなどがある。

②：カラスと「五穀豊穣」

前節ではカラスの死肉食に注目して取り上げたが、人にとっては食害も重要な関心事であり、これに関わるカラスは農耕儀礼の中にも登場している。一種はカラスを害鳥と見做して、カラス追い儀礼を行うことでカラスがもたらす食害を減らし、豊作を祈る儀礼である。正月行事に多く、祭りを行ってカラスを追い払い豊作を祈る儀礼(「上原鳥追い祭」長野県佐久市、1月3日)や、カラスの絵の的を射て、当た

れば豊作・当たらねば凶作と占う儀礼(カラス的の「オビシャ」近畿や関東、1月1日～7日)がこれに当たる。また、害鳥ではあるが美味しい米を狙うという点に目をつけて、投げた餅を食べるか否かで豊凶を占ったり、供えた食べ物のいづれを食べたかによって種蒔の季節を決めたりする儀礼(「御鳥喰式」「鳥勧請」など)も行われており、今日では厳島神社の御鳥食式、熱田神宮(現在は撰社の御田神社主催)の鳥祭り、津島神社の鳥呼びなどがこれにあたる。

一方でカラスを害虫を食べてくれる益鳥と見做して、カラスの力を借りることで豊作を祈ろうとするケースもある。八咫鳥を祀る神社で頒布される、五穀豊穣や悪疫防除を利益とした「鳥扇」「鳥団扇」がそうだ。扇ぐことでその利益を発揮するという授与品である。

③：カラスと「太陽」

東アジア地域において、3本足のカラスを太陽の象徴とした意匠化や神格化がみられる。この3本足のカラスというのは、中国の金烏伝説が古代グローバリゼーションに伴い周辺国へ伝播したことによるものだろう。本節では古代グローバリゼーションが盛んに起こっており、日本にとっても近隣諸国である中国・韓国・日本において3本足のカラスがどういったイメージを形成しているのかを調査した。

金烏とは3本足のカラスで、太陽に住むもしくは太陽の化身と、三足鳥や火鳥とも呼ばれる。また、そこから転じて、中国では太陽の異称を「金烏」「鳥輪」としている。『淮南子』を参照すると、太陽に3本足のカラスを太陽の象徴に据える一方、月には蟾蜍(ヒキガエル)もしくは玉兔(ウサギ)がその象徴として据えられている。前者の太陽に関しては、夕暮れを飛ぶカラスもしくは太陽の黒点をカラスとした連想、後者の月に関しては月面の模様からヒキガエルまたはウサギを連想することからこういった思想が生まれたものと考えられる。3本足である理由については、陰陽五行思想において「3」などの奇数が「陽数」とされることに関連があるのではないかと思われる。

韓国では三足鳥は太陽に住む3本足のカラスとされ、太陽=天孫信仰の流れを汲み、天孫の象徴ともされる。韓国の三足鳥は「龍を食らう」といわれて

おり、吉田司氏は「この龍とは中国皇帝の象徴であり、高句麗と中国との対立を間接的に表現したもの」だと考察している(吉田2011)。

日本では3本足のカラスというと記紀神話に登場する八咫鳥の特徴とされるが、実は記紀中にその容姿に関わる明確な記述はない。現在の八咫鳥の姿については恐らく大陸から伝わった金烏伝説が変化した、もしくは土着の説話と合流したものと思われる。金烏伝説が伝わっていた証拠として、日本では八咫鳥との同一視以外にもその存在を確認することができる。『延喜式⁶』卷二十一治部省に「三足鳥 日之精也。白兎 月之精也。」という記述がみられることから、10世紀には中国に倣い、「3本足のカラス=太陽のシンボル・瑞鳥」、「ウサギ=月のシンボル」としていたことがわかる。また、カラスとヒキガエル・ウサギを太陽と月に充てた意匠は先述した天の鳥船図の他、「仏教美術」や「天皇に関わる装具」にも見ることができる。天の鳥船図は数種発見されているが、珍敷塚古墳の壁画では左部の舳先に鳥が留まった船の上に日輪が、右部に月とヒキガエルが描かれており、金烏蟾蜍の意匠に従い、鳥をカラスとする説が有力だ。仏教美術では7～8世紀に建立された法隆寺に納められている玉虫厨子台座絵背後に描かれた須弥山⁷図、釣簾⁸の意匠。慈恩寺(山形県)所蔵の仏像では、薬師如来の脇仕である日光菩薩と月光菩薩の持ち物にこの意匠が凝らされている。熊野の東光寺所蔵の薬師如来厨子、その扉の図には日光菩薩と3本足のカラスが描かれており、この図は熊野地方に残る3本足のカラスの最古の絵といわれている。天皇に関わる装具では天皇が統べる対象や天皇自身としてカラス(ヒウサギなど)が象徴化されている。天皇の礼服である大袖「袞竜衣」の刺繡では左肩の日輪には3本足のカラスが、右肩の月輪にはウサギ、ヒキガエル、ウスとカツラの木が配されている。朝廷で行われた元旦朝賀・即位式に用いられる道具として光格天皇即位図を見ると「銅鳥幡」「日像幡」に3本足のカラスが、「月像幡」にウサギとヒキガエルが描かれている。この形式は明治天皇の父である孝明天皇の即位礼まで用いられていた。

なぜカラスは太陽に関連付けられたのだろうか。生態と結びつけて考えるとするならば、昼行性であること、つまり日の出頃から行動し始め日の入りと

共にねぐらに帰るという太陽に則した行動することが関係するのではないかと考えられる。また黒い容姿と暑さ・熱さから太陽が連想されたと考えることもできる。カラスはかつて黒い羽毛ではなかったとする「カラス黒化類話」は世界各地に伝えられているが、現在の調査段階では変色の理由が炎熱にあるケースが多く、この炎熱に太陽が該当している可能性も考えておきたい。また、カラスの姿を「太陽の黒点」に見立てたとする説もある。通常、計器を使わずに黒点を見ることは不可能だが、日没や日食などで太陽光が滅光すると、大きな黒点であれば肉視することができたという(篠田 2008)。金鳥は太陽に住むと考えられているが、これは太陽の黒点を金鳥に見立てたことにあるのかもしれない。また、ギリシア神話の太陽神アポロンがその御先であった白いカラスを罰して黒く変じさせた説話なども興味深い例である。

以上の理由から、カラスの昼行性やカラスの黒一色の姿から連想された、というのが有力な説だろうと考えられる。また太陽神自体の特徴として、太陽が昇沈する様子から、太陽神は太陽そのものを神格化する場合と、太陽の運行を司るものを太陽神に据える場合がある。運航を司るもの…つまり鳥に対して太陽のイメージを宛てることは後者の一例であろう。エジプト神話における太陽神ラーが、昼間はハヤブサの姿で天を飛ぶが、夜間は雄羊となって死の世界である夜を船で渡るとされる説話もこの類型だろう。

④：カラスと「先導」「戦勝」「八咫烏」

先立って挙げたが、記紀神話に登場するカラスに八咫鳥と名の付いたカラスがいる。熊野社や賀茂社で祀られているほか今日では日本サッカー協会のシンボル・日本代表エンブレムとしても有名だろう。姿や正体については諸説あるが、神武東征にあたり、天から使わされて神武天皇の大和への「先導役」をこなしたとされるカラスを指す。東征に寄与したことから「戦勝」の神ともされる。先導者を務めたカラスである。

姿は一般に3本足のカラスとされるが、記紀神話中にはその描写はない。名前から読み取るならば、大きなカラスである。「やた」とは「長いこと、巨大

なこと」を表し、「8咫」を約した言葉である。「咫」とは上代の長さの単位で、8咫は3釡2寸=約1mにあたる。『日本書紀』には「頭八咫鳥」と書かれており、本居宣長はこれを「八^や頭^{あたま}鳥」と解し、頭のたくさんあるカラスとした(萩原 1999:11)。今日3本足であるのには、古代中国から周辺国への文化伝播が深く関わっていると思われる。太陽鳥である3本足のカラス「金鳥」が変化し八咫鳥となったか、八咫鳥と同一視されたというのが大きな理由だろう。実際に『伊勢国風土記』逸文では、神武天皇を先導したのは金鳥と記されており、「金鳥」と「八咫鳥」の混濁が見受けられる。今日において八咫鳥は御先、先導者(守護者)であると同時に金鳥の特徴(3本足、太陽の化身)を併せ持ったものとして祭祀されている。

終章：人が捉えるカラスの「姿」とは

本論文では筆者が収集した説話・意匠の事例をもとにカラスイメージの形成背景やその過程について考察してきた。第3章で整理・考察してきたように、人はカラスの「生態」を捉え、その生態を捉えたからこそカラスに対して様々な「イメージ」を形成してきたのだ。そうして付与されたイメージは清邪貴賤の幅広くあるが、いずれもカラスの生態から得たイメージが観察者の置かれた環境・背景によって解釈されたものであり、ひとつのイメージから吉凶まったく両端のイメージ解釈が行われていた。中国の金鳥伝説のように、ひとつの「イメージ(3本足という意匠)」が各地域各文化のカラス「イメージ(説話・意匠)」と共有・合流していく例もみられた。人が捉えるカラスの姿とは自然的な「生物」としてのカラスと、生態に対して沸き起こる「イメージ」、そしてイメージを付与されイメージの比喩・象徴となっていく「イメージキャラクター」の姿であった。

本論文は枚数制限の都合上、採り上げられなかつたイメージ要素、諸外国の言葉・説話・意匠があるが、以降の卒業研究では更に地域を広げて収集を行い、カラスの「生物」性とそこからなる「イメージ」形成の多様性について研究を深めていきたい。

人が捉えたカラスの姿

註

- 1 渡りなどの季節的移動を行わず、年間を通じて同じ地域に生息する鳥。
- 2 翼を広げた両翼の左端から右端までの長さ。「翼幅」ともいう。
- 3 神に仕え、遣わされるもの。神の眷属・使者・代行者。
- 4 アメノワカヒコは地上平定のために地上に遣わされるも、これを遂行せず、また天上に帰らなかったために殺されてしまう。アメノワカヒコの父、アマツクニタマが息子の死を知り遺体を天上へ引き上げさせ、葬儀に必要な様々な役割を鳥たちに充てて葬儀を行った。アメノワカヒコ伝説は記紀神話のいずれにも記されているが、『古事記』と『日本書紀』とでは登場する葬儀の役割・鳥の種類に違いがある。カラスは『日本書紀』の一説で「宍人者（：宍とは肉のこと、死者の食べ物を運ぶ役）」の任を預かった。
- 5 詳細は第3章④を参照。
- 6 平安時代の法令集。927年に完成。
- 7 仏教やヒンドゥー教において世界の中心にあるとされた山。
- 8 篓火を盛って吊るす容器。

参考文献

- ・ウォーカー、バーバラ『神話・伝承事典—失われた女神たちの復権』大修館書店、1992年
- ・宇田川竜男『カラスの話』小峰書店、1985年
- ・大田眞也『カラスはホントに悪者か』弦書房、2007年
- ・岡正雄『異人その他：岡正雄論文集：他12篇』岩波書店、1994年
- ・萱野茂『炎の馬—アイヌ民話集』すずさわ書店、1998年
- ・清田圭一『自然の神々—その織りなす時空』八坂書房、2000年
- ・クレベール、ジャン・ポール『動物シンボル事典』大修館書店、1999年
- ・篠田知和基『世界動物神話』八坂書房、2008年
- ・千田稔『古事記の宇宙（コスモス）—神と自然』中央公論新社、2013年
- ・辻本正教『鳥から読み解く「日本書紀・神代卷」日本文化とトーテミズム』明石書店、2013年
- ・中村生雄・三浦佑之『人と動物の日本史4 信仰のなかの動物たち』吉川弘文館、2009年
- ・本田健一『京都の神社と祭り』中央公論新社、2015年
- ・萩原法子『熊野の太陽信仰と三本足の鳥』戎光祥出版、1999年
- ・ブレキリアン、ヤン『ケルト神話の世界』中央公論社、2011年
- ・星野道夫『森と氷河と鯨-ワタリガラスの伝説を求めて』世界文化社、1997年
- ・マーカタント、アンソニー・S『空想動物園』法政大学出版局、1988年
- ・松原始『カラスの教科書』雷鳥社、2013年
- ・松村一男『世界と日本の神々』西東社、2007年
- ・ミルワード、ピーター『聖書の動物事典』大修館書店、1992年
- ・大和岩雄『神と人の古代学—太陽信仰論』大和書房、2012年
- ・吉田敦彦『世界の神話伝説 総解説』自由国民社、2002年
- ・吉田司『カラスと觸膜』東海教育研究所、2011年
- ・熊野本宮大社公式サイト「八咫鳥について」
<http://www.hongutaisha.jp/%E5%85%AB%E5%92%AB%E7%83%8F/>
(2017年1月23日閲覧)
- ・茶の湯の森「平成の玉虫厨子」
<http://www.nakada-net.jp/chanyou/tamamushi/pictures.html>
(2017年1月23日閲覧)
- ・「三本足のからす」
<http://katori.cc/karasu/karasu-3/karasu/karasubook.htm>
(2017年1月23日閲覧)